

文殊菩薩の浄土經典

—— 蔵訳〈文殊師利仏土厳浄経〉第四函の和訳研究（上） ——

中御門 敬 教

はじめに

文殊菩薩の浄土經典である蔵訳〈文殊師利仏土厳浄経¹⁾〉（以下、〈文殊仏国経〉）の翻訳研究を行う。当経は未翻訳であり、詳細な解題が存在しないため、その全体像の紹介を目的とする。この浄土經典を紹介することによって、壮大な文殊菩薩の誓願とそれによる世界を示したい。

今回扱う範囲は当経蔵訳の全体四函のうち第四函の前半部分、範囲は（P. Wi. 321a–331b）（D. Ga. 282a–290b）である²⁾。第一函訳註は『佛教大学総合研究所紀要』21（2014）に、第二函訳註は『仏教文化研究』58（2014）に、第三函訳註は『佛教大学仏教学部論集』98（2014）に掲載予定である。翻訳の方針については上記拙稿に従った。解題的なものとしては『印度学仏教学研究』62-1（2013）に、「文殊の誓願行と浄土經典—〈文殊師利仏土厳浄経〉所説の「菩薩の学処」「大波濤誓願」「往生説」—」として掲載した。

本稿で扱う第四函前半部分では、文殊菩薩の誓願文が中心である。〈無量寿経〉や〈阿閼仏国経〉に比較すると未整理の感が拭えないが、間違いなく本経の重要箇所である。紙数の関係で考察できなかったが、この誓願部分に関しては、漢訳諸本との詳細な比較が求められる。誓願行が基本となる、インド浄土教の展開に必須の經典である。

〈聖なる文殊の仏国土の功德莊嚴〉と名付けられた大乘經典

（P. Wi. 321a）（D. Ga. 282a）第四函すなわち、最終〔函〕。

仏国土の功德莊嚴に関する質問

それから世尊に対して、獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩はこのように申し上げた—
「世尊よ、このマンジュシュリー童子の仏国土の功德莊嚴はどのようなものになるでしょうか。(D. Ga. 282b) 如来よ、良く教示してください。」

世尊は仰った—

「良家の子よ、〔他ならぬ〕このマンジュシュリー童子こそ尋ねなさい。」

それから獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は、(P. Wi. 321b) マンジュシュリー童子に対してこのように述べた—

「マンジュシュリーよ、あなたの仏国土の功德莊嚴はどのようなものになるでしょうか。」

〔マンジュシュリーは〕述べた。

「良家の子よ、菩提（正覚）に対して歡喜する者、彼に尋ねなさい。」

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、あなたは菩提に歡喜しないのですか。」

〔マンジュシュリーは〕述べた。

「良家の子よ、そうではありません。それはなぜかといえば、歡喜する者〔である〕彼は貪欲（'dod chags）を離れていない。貪欲を離れていない者〔である〕彼は渴愛する。渴愛が、そこにある〔ところの〕彼は、〔輪廻に再び〕生ずるであろう。生が、そこにある〔ところの〕彼には受がある。そこに受がある〔ところの〕彼に出離はない³⁾。良家の子よ、したがって、私は菩提に歡喜することがない。菩提として認得することがないので、ゆえに歡喜することがない。良家の子よ、そうであるが、それでもなお、あなたがこのように、「あなたの仏国土の功德莊嚴はどのようなものになるのか」と述べたことは、それについて私は自己賞讚できません。それはなぜかといえば、如来〔である〕一切法を了解なさる者（thugs su chud pa）が現前に居られながら、私の仏国土の功德莊嚴を私が述べるならば、それは菩薩摩訶薩の自己賞讚となる。」

仏国土の功德莊嚴の誓願を説くこと⁴⁾

世尊が〔マンジュシュリー童子に〕仰った—

「マンジュシュリーよ、あなたは、〔他ならぬ〕あなたこそこの仏国土の功德莊嚴の誓願を示しなさい。如来は〔そうすることを〕許可なさった。それはなぜかといえば、あなたからそれらの誓願が聞こえるなら、他の菩薩摩訶薩たちもそのような行 (spyod pa) を円満に完成します。」

マンジュシュリーが申し上げた—

「世尊よ、私は (P. Wi. 322a) 如来のお言葉について、もはや退けません。仏の威力をもって示しましょう。(D. Ga. 283a)」

それからマンジュシュリー童子は座から立ち上がり、上衣を一方の肩にかけた。右膝の膝頭を地につけて、世尊・如来〔である〕釈迦牟尼の〔居られる〕その場所の傍らで合掌して、拜んで、世尊に対してこのように申し上げた。

「世尊よ、そのために良家の息子と、良家の娘〔であり〕、菩提を希求する者たちが私に聞いて、それらの誓願が聞こえてからもまた、円満に完成する。同様に慇懃になすならば、私は示しましょう。」

そのように、マンジュシュリー童子は右膝の膝頭を地につけるやいなや、それからその瞬間に、ガンジス河の砂〔の数〕ほどの十方の〔諸々の無数の〕世間は、六種に震動した⁵⁾。

誓願文 一仏の障碍のない眼、六波羅蜜

それから世尊に対して、マンジュシュリー童子はこのように申し上げる—

「世尊よ、十万コーティ・ナユタの無数劫〔の昔〕より以来、私が誓願を立てたのは、いつか私が、十方の世界〔すなわち〕無際無辺の世界において、仏の障碍のない眼⁶⁾によって見たならば、ありとあらゆる仏・世尊たち彼らすべてを、私が菩提に対して正しく悟入させたし⁷⁾、私が菩提心に立たせて、(P. Wi. 322b) 私が布施に正しく悟入させたし⁸⁾、同様に私が戒と、忍と、精進と、禅定(静慮)と、智慧に正しく悟入させた、私が勧めた、私が教授したことが見えていない、そのかぎりにおいて、私は無上の正等覚を現等覚しません(mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar mi bya'i)⁹⁾、〔しかし〕いつか私が仏の障碍のない眼によって十方を見ても、私が仏陀 (sangs rgyas nyid) に立たせていない (ma bkod pa) 如来そのようなどんな者も見えなかった、(D. Ga.

283b) その時、私もまた無上の正等覚を現等覚しましょう。」という誓願を立てた。

数量の勘定

それからその〔座にいる〕眷属の中から、或る菩薩はこのように思った¹⁰⁾—
「このマンジュシュリー童子は、どれほどの仏・世尊が見えるであろうか。」
と、それから世尊は彼ら菩薩の心の分別を了解なさって、獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩に対して、このように仰った—

「良家の子よ、すなわち譬えば、ある一人の丈夫が生まれた。彼は、この三千大千世界を (P. Wi. 323a) 極微細な塵に砕いて、破壊し、灰としたならば、良家の子よ、それをどう思いますか。それら極微細な塵の塵を計算できる者、あるいは算術に巧みな者たちが¹¹⁾、〔塵は〕この百ほどがあるといい、あるいはこの千ほどがあるといい、あるいはこの十万ほどがあるといい、あるいはこの千の千ほどがあるといい、あるいはこの百千の千ほどがあるといい、あるいはこの千の千の千ほどがあるといい、あるいはこの千の千の千の千ほどがあると知ること、あるいは数えること、あるいは測ること、あるいは量を捉えることはできますか。」

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕申し上げた—

「世尊よ、できません。善逝よ、できません。」

世尊は仰った—

「マンジュシュリー童子が、仏の障碍のない眼によって、見たならば、十方〔世界〕の各々にも、それほどの仏・世尊たちが見えるであろう。」

誓願文 一国土の莊嚴

それから世尊に対して、マンジュシュリー童子はこのように申し上げる—
「世尊よ、私は¹²⁾、私の一つの仏国土において、多くのガンジス河の砂〔の数〕ほどの、仏国土ほど広大な拡がりがある成就せず、その仏国土が多くの十万の宝から成就し¹³⁾、多く十万の宝によって飾られ、(D. Ga. 284a) 多く有頂〔天〕(srid pa'i rtse mo) の量となっていない間においては、無上の正等覚を現等

覚しませんという、誓願を立てました。(P. Wi. 323b)

誓願文 一菩提樹の光明

世尊よ、さらに私は、その仏国土に十の三千大千世界の量ほどの菩提樹が生じ、その菩提樹の光明が、その仏国土すべてに拡がり、遍満しますように¹⁴⁾という、そういう誓願を立てました。

誓願文 一菩薩の変化と教化

世尊よ、さらに私は、菩提樹の下で私が坐る時に、無上の正等覚を現等覚〔すなわち成仏〕してから般涅槃するまでの間にその菩提樹のもとから立っていないが、私の変化は十方〔世界〕の一々に〔広がり〕、十万コーティ・ナユタの無数の仏国土に行きわたり、衆生たちに説法しますようにという、そういう誓願を立てました。

誓願文 一声聞と独覚のいない仏国土、菩薩のみの仏国土

世尊よ、さらに私は、私のその仏国土において、声聞と独覚との名前ほとんど全く無くなって、菩薩は瞋 (Tib. zhe sdang, Skt. dveṣa) と、忿怒 (tha ba) と、覆い隠すこと ('chab pa) とはなく、梵行を清浄に行う者のみが、その仏国土を満たし、その仏国土には女人の名も知られないし、胎生はない。彼らすべての菩薩も〔僧衣の〕上衣、〔壊色の〕袈裟を着て、結跏趺坐して化生した。その仏国土はたいそう清浄になった。如来の変化が、十方の十万コーティ・ナユタの無数の世界に至り、衆生たちに説法するそれらは三乗に関して、信解により如理に、衆生たちに説法することを除き、(P. Wi. 324a) その仏国土には声聞と独覚とはなく、菩薩が遍満しますようにという、(D. Ga. 284b) そういう誓願を立てました。」

マンジュシュリー童子の成仏時の名号 一普見如来一

それから世尊に対して、獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩はこのように申し上げる—
「世尊よ、マンジュシュリー童子は、菩提を現等覚したならば、どのような名

の者になるのでしょうか。」

世尊が仰った—

「良家の子よ、普見 (Kun tu gzugs pa)¹⁵⁾如来という者になる。良家の子よ、これをどのように考えますか。かの如来は、どうして「普見如来」というかといえ、良家の子よ、かの普見如来は、十方の百千コーティ・ナユタの無量無数の世界すべての諸仏・世尊が見えるであろう。そして、その如来が見えるであろう〔ところの、〕衆生彼らすべても、無上の正等覚に決定するであろう。そして良家の子よ、現在の時でも、あるいは涅槃した時でも、かの如来・応供・正等覚者〔である〕普見の名号が聞こえる〔ところの〕彼ら〔衆生〕は、無変異に入った者 (mi 'gyur pa la zhugs pa)¹⁶⁾と、小さな信解の者 (ブドガラ) たちとを除き、あらゆる者も無上の正等覚を現等覚するので、ゆえにその如来は普見如来という。」

誓願文 一食と風による救済

それから、また世尊に対して、マンジュシュリー童子はこのように申し上げる—

「世尊よ、私¹⁷⁾による誓願は、(P. Wi. 324b) 如来・無量光が喜悅の食 (dga' ba'i zas) を具えるよう¹⁸⁾、誓願をなされたようなものでもありません。世尊よ、私は、私のその仏国土に生まれた菩薩たち彼らが食物の想いが生じたなら、たちまちその刹那に、彼らは右手に幾百の味が具わった (D. Ga. 285a) 食物が満ちた器が生じて、それらの器が生ずるやいなや、彼らはこのように思った—このように私たちは十方の諸仏・世尊に献げないで衆生〔、すなわち〕貧しく困窮により苦しむ者と、依怙主が無くなった者たちと、餓鬼の世界に生まれた者たち〔、すなわち〕幾千の年においてもどんな^{めやに}目脂も得られない、そのような者たちを全く満足させていなくては、私自身が食することは、性に合わないという (tshul¹⁹⁾ dang mi 'dra'o zhes bgyi bar²⁰⁾) 憶念を得たし、その瞬間に彼らは五神通を成就した²¹⁾。神力を具え、虚空から去って、風のように障りない力によって、十方の無数、無量の世界に至って、その食事のうちから、声聞の僧伽を伴った如来にも献げた。困窮し飢えた衆生と、依怙主がない者たちと、

餓鬼の世界に生まれた者たちも全く満足させてから、彼らに説法して、一刹那によりその仏国土に、再び戻りますように、というそういう誓願を立てました²²⁾。

誓願文 一衣服の享受

世尊よ、さらに私は、私が菩提を得た時、私のその仏国土 (P. Wi. 325a) において生まれたあらゆる菩薩たち彼らが、種々の宝の衣服²³⁾の享受 (受用) を具え、ただ思ったほどで²⁴⁾、何についても悦ばしい宝の衣服〔すなわち〕沙門のあり方と一致し適切なもの²⁵⁾が生じて、それら宝の衣服が生ずるやいなや、このように思う— このように私たちが、このような衣服を、十方の諸仏・世尊に献げずに、私たちだけが享受 (受用) することは、性に合わないという憶念 (snyam pa'i dran pa) を得てから、彼らのそのような心が生ずるやいなや、無量無数の諸世界に至り、それらの衣服を諸仏・世尊に (D. Ga. 285b) 纏^まわらせて、再びその仏国土に戻って、およそ悦ばしい宝の衣服を享受 (受用) しますように、というそういう誓願を立てました。

誓願文 一八難、不善の声、過失の声が無いこと

世尊よ、同様にその仏国土において、彼ら菩薩摩訶薩たちの享受 (受用) と使用 (yongs su spyod pa) のあらゆるものそれら一切切を、声聞の僧伽を具えた仏・世尊に対して献げて、後に私たちが使用するでしょうし、その仏国土においては〔無暇の〕八難²⁶⁾がありませんし、その仏国土においては不善の^{ことば}声もありませんし、その仏国土においては苦^{ことば}の声はありませんし、その仏国土においては過失となる^{ことば}声もありませんし、その仏国土においては、色と、声と、香と、味と、所触の〔うち〕心に適わないものはありませんように、という誓願を立てました。

普見如来の仏国土

それから世尊に対して、(P. Wi. 325b) 獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩はこのように申し上げる—

「世尊よ、そこにかの如来・世尊〔である〕普見が出現するであろうその世界

の名は何というものになるのでしょうか。」

世尊は仰った—

「誓願のとおりに円満に完成し、清浄であり、無垢により集積された²⁷⁾ (sMon lam ji lta ba bzhin du yongs su rdzogs shing dag la rdul med pas bsags pa) という世界になる。」

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕申し上げる—

「世尊よ、その世界はどの方角に出現するのでしょうか。」

世尊は仰った—

「良家の子よ、その世界は南方に出現するでしょう。まさにこの娑婆世界こそ、その中に収まっているし、含まれるでしょう。」

誓願文 一宝による莊嚴とそのすぐれた境地

それから世尊に対して、マンジュシュリー童子がさらにこのように申し上げる—

「世尊よ、私は誓願をこのように立てました。私のその仏国土は、多くの十方のコーティ・ナユタの宝 (D. Ga. 286a) によって満たされ、多くのマニ宝によって飾られているので、マニ宝を普く示現したものと等しくて、それらの宝もまた十方世間において稀であり、以前²⁸⁾見られず、あり得ないもののみです。それらの名を述べたとしても、百千コーティ年かかるでしょう (thogs par 'gyur pa)。そのようなマニ宝が、その仏国土を完全に満たしている。その仏国土における幾らかの菩薩は、この仏国土は金から成就したのを見て嬉しいと思ったとしても、彼は金から成就したのが見えるのと、銀から成就したのが見えて嬉しいと思ったとしても、銀から (P. Wi. 326a) 成就したのが見えるが、他者が金から成就したのが見えないことにはならないし、同様に、昆瑠璃から成就したのと、玻璃から成就したのものや、赤真珠から成就したのと、緑珠 (rdo'i snyin po) から成就したのと、白珊瑚から成就したのものや、同様に種々の宝の因から成就したのものや、栴檀から成就したのものや、アガルから成就したのものや、タカラから成就したのものや、タマラの葉から成就したのものや、蛇心栴檀から成就したのものや、赤栴檀から成就したのものや、誰かが望むとおりの

種類が、彼らは同様に見えます。お互いに仏国土が異なったものと見えることもないでしょうし、その仏国土における菩提樹から光明が出現して、各々の菩薩から光明が出現したことによって輝き、明るいこと以外に、日と月の光明も現れない (mi mngon)。星座と、宝と、火と、雷、あるいは他の衆生のどの光明も現れない。どれほどに光明が遍満して有るのは、乃至、十万コーティ・ナユタの仏国土それほどまでに、それらの光明は明るくなる。その仏国土においては、菩薩たちの特別の思い (bsam pa'i khyad par) によって花が開いて、閉じるでしょう。そして時と分量の様相は、(D. Ga. 286b) [菩薩たちが] 受用しようと楽うままである (gang dus dang tshod rnam pa ji lta bur yongs su spyad par 'tshal ba)²⁹⁾。そのように、それが成就している以外に、昼夜の名もない。そしてその仏国土においては、寒さと、暑さもない。老と、病と、死もない³⁰⁾。(P. Wi. 326b) 菩薩〔、すなわち〕菩提を³¹⁾現等覚するよう楽う者、彼は他の世界に赴き、兜率天の住処において寿命を済ませてから³²⁾、菩提を現等覚するでしょう³³⁾。そしてその仏国土の上の空中 (steng gi bar snang) から³⁴⁾、見えない十万コーティ・ナユタの楽器が常に間断なく、音声 (sgra) を発する。それらの楽器からも欲望にかなった音声は生じないが、他に波羅蜜の^{ことば}声 (sgra) と、仏の声と、法の声と、僧伽の声と、菩薩蔵 (byang chub sems dpa'i sde snod)³⁵⁾の法門の声を発するであろう。彼ら菩薩が信解したとおりの音声聞こえるであろう。菩薩〔、すなわち〕彼らはその如来を見ようと楽ったり、歩いたり、行ったり、来たり、坐ったり、とどまっても、彼らはそこで、仏を見る作意 (yid la bgyi ba) が生ずるやいなや、彼らは如来・応供・正等覚者〔である〕普見が菩提樹のもとに坐っておられる (bzhuys pa)、まさにそこに坐っておられるよう見えたし、見てからもその世尊が見えるやいなや、彼らの疑い (the tshom)、あるいは疑惑 (nem nur)、あるいは疑心 (yid gnyis)³⁶⁾、あるいは法の懷疑 (som nyi) のあらゆるものを完全に断つであろう。教示を楽わずにその法の句の意味を完全に楽おうというように、誓願を立てました。」

授記と聞名

それからその眷属の幾十万のコーティ・ナユタの菩薩たちが口をそろえて述

べました—

「この「普見」という名号 (mtshan) は、それは性に合う」といって、彼ら衆生〔、すなわち〕(P. Wi. 327a) かの世尊・如来・普見の名号が聞こえた彼らはまた、利得を良く得た者であるなら³⁷⁾、その仏国土に生まれるであろうことは³⁸⁾ (D. Ga. 287a) 言うまでもない。およそこの授記の法門が聞こえた者たちと、マンジュシュリー童子の名前が聞こえた者たち彼らは、仏が現前に見えるよう見る (mngon sum mthong bar blta'o)。」

そのように〔諸菩薩は〕述べた。

マンジュシュリーの名を称えること (称名) とその功德

世尊は彼ら菩薩に対して、このように仰った—

「良家の子たちよ、それはそのとおりです。述べたそのとおりです。良家の子たち〔、すなわち〕十万のコーティ・ナユタの仏の名号³⁹⁾を称えること (mtshan brjod pa)⁴⁰⁾より、誰かがマンジュシュリー童子の名 (ming) を称えるならば、まさにこの者は、それより福德をはるかに多く生ずる〔。それ〕なら、かの世尊・如来・普見の名号を称える者はいうまでもありません⁴¹⁾。それはなぜかという、マンジュシュリー童子が各劫に衆生利益を行った、あらん限りのその衆生利益は (ji snyed du byas pa'i sems can gyi don de ni)、十万のコーティ・ナユタの仏も行われなかった。」

マンジュシュリーへの敬礼とその功德

それから、この眷属の天と、龍と、ヤクシャと、ガンダルヴァ (乾闥婆) と、アシュラ (阿修羅) と、ガルダ (迦楼羅) と、キンナラ (緊那羅) と、マホーラガ (摩睺羅迦)、〔以上〕人と人でない者⁴²⁾〔である〕幾十万のコーティ・ナユタの者が、口をそろえてこのように述べた—

「マンジュシュリー童子に敬礼します ('Jam dpal bzhon nur gyur pa la phyag 'tshal lo⁴³⁾)。普見如来に敬礼します。」

そのように述べた。その瞬間に、八百四十万のコーティ・ナユタの生きもの (srog chags)⁴⁴⁾が無上の正等覚に発心した。無量の衆生たち (P. Wi. 327b)

も善根を成熟した。無上の正等覚より不退転となった。

誓願文 一諸仏国土の莊嚴を一仏国土へ摂取する

世尊に対して、マンジュシュリー童子はさらにこのように申し上げる—
 「世尊よ、私は、このように十方の十万のコーティ・ナユタの無量無数の諸世界に居られる諸仏・世尊の仏国土の功德莊嚴の飾り (rgyan) と、(D. Ga. 287 b) 誓願の飾りと、相 (mtshan nyid) と、兆相 (mtshan ma) と、浄化 (sbyong ba)⁴⁵⁾と、住处 (gnas) の種類の飾り、そのあらんかぎりのものが見えたものより (gang ji snyed cig mthong ba las)、声聞の莊嚴と、五濁の〔時代の〕仏たち〔の国土〕を除いて、それらすべてを、私は一つの仏国土の中に摂取して⁴⁶⁾了解しよう、という誓願を立てました。

世尊よ、私が染うなら、ガンジス河の砂〔の数〕ほどの〔無数の〕劫において、私の仏国土の功德莊嚴に関して、別々の形相として取らえることがないやり方で提示するより他なしに説明したり⁴⁷⁾、それよりも長く説明しても、仏国土のそれら功德莊嚴は究極に至ることはないでしょう。世尊よ、私による誓願の形相 (rnam pa) がおよそどのようなものか、それについて、如来・応供・正等覚者を除いて、証人となった他の者は誰もいません⁴⁸⁾。」

普見如来と無量光如来 一両者の仏国土功德莊嚴の比較

世尊が仰った—

「マンジュシュリーよ、それはそのとおりです。如来は了解なさいます。如来・応供・正等覚者の智慧 (ye shes) には、(P. Wi. 328a) 障碍が無い。〔それは〕三世すべてに起こる ('jug bo)。」

それからその眷属の中から、或る菩薩がこのように考えた—

「マンジュシュリー童子が、自らの仏国土のその莊嚴功德を説いたものと、世尊・如来〔である〕無量光の仏国土〔である〕極楽世界において⁴⁹⁾、仏国土の功德莊嚴が有るその二つは同じなのか、それとも同じではないのか。」と〔考えた〕。

そこで世尊は彼ら諸菩薩の心の分別 (sems kyi rtog pa) を心で了解なさつ

て、師子勇猛雷音菩薩に対して仰った—

「良家の子よ、すなわち、例えばある者が毛髪先端を百に割った〔その一〕部分によって、大海から水滴 (D. Ga. 288a) 一つを取ったならば— 良家の子よ、これをどう思いますか。その取られた水と、後に残ったそれとの二つはどちらが多くなりますか。」

〔師子勇猛雷音菩薩は〕申し上げた—

「世尊よ〔一毛で〕取られたものは少なく、後に残ったものは無量です。」

世尊は仰った—

「良家の子よ、その人が毛髪先端を百に割った〔その一〕部分により、大海から水滴一つを取ったものその程度に、極楽世界〔すなわち〕無量光如来の仏国土の功德莊嚴を〔私は〕見ます。大海における水の残りのあらゆるものその程度に、世尊・如来・応供・正等覚者〔である〕普見の仏国土の功德莊嚴を見ます⁵⁰⁾。」

普見如来と普光功德常多海王如来 一両者の仏国土功德莊嚴の比較

それから世尊に対して、師子勇猛雷音菩薩はこのように申し上げる— (P. Wi. 328b)

「世尊・如来〔である〕普見の仏国土の功德莊嚴の、そのような様相 (rnam pa) は⁵¹⁾、他の或る如来に〔過去に〕在ったでしょうか (mnga' bar gyur tam)。〔未来に〕在ることになるでしょうか。現在、或るものに⁵²⁾そのような〔様相〕が在ると見ることもありましょうか。」

世尊は仰った—

「良家の子よ、あります。この仏国土から東方の方角に、百コーティのガンジス河の砂〔の数〕ほどの仏国土を過ぎ去ったところに、住最上願⁵³⁾ (sMon lam la rab tu gnas pas mngon par 'phags pa) という世界がある。そこには⁵⁴⁾如来・応供・正等覚者〔である〕普光功德常多海王⁵⁵⁾ (Kun nas 'od zer yon tan rtag tu mang ba brgya mtsho'i rgyal po) というもの〔、すなわち〕寿命の量は無量な者が、現在居られる。〔すなわち〕生きて、住し、無量の菩薩衆によって囲まれて、直面して (mdun gyis bltas te)、法を教示する⁵⁶⁾。良家の

子よ、普見如来の仏国土の功德莊嚴の円満となるであろうものと、現在、世尊・如来・応供・(D. Ga. 288b) 正等覚者〔である〕普光功德常多海王の仏国土の功德莊嚴であるもの— その二つは等しく、過不足はない (lhag chad med do)。良家の子よ、菩薩は不可思議の鎧を被り、大いなる発趣 ('jug pa chen po) をもって発趣した、このマンジュシュリー童子のまさにこの行に住する四人〔の菩薩〕がいる。彼ら菩薩の仏国土の功德莊嚴もこれと同じになるでしょう。」

四方の仏国土とその四菩薩

〔師子勇猛雷音菩薩は〕申し上げる—

「世尊よ、彼ら菩薩の名を教示してください。彼ら菩薩が (P. Wi. 329a) どこに居るのかと、世尊・如来〔である〕普光功德常多海王の仏国土も教示してください。その如来と、それら菩薩も教示してください。それは何のためかといえ、他の菩薩たちも、そのような仏国土の功德莊嚴を摂受するであろう、ためにです。」

世尊は仰った—

「良家の子よ、ゆえに聞きなさい。すると教示しよう。良家の子よ、一人の菩薩は、光頂 ('Od kyi tog)⁵⁷⁾ という。〔すなわち〕東の方角における、世尊・如来〔である〕無憂吉祥 (Mya ngan med pa'i dpal)⁵⁸⁾ の⁵⁹⁾ 仏国土に居る。二人目は、智上 (Ye shes bla ma)⁶⁰⁾ という。〔すなわち〕南の方角における、世尊・如来〔である〕慧勝 (Ye shes rgyal ba)⁶¹⁾ の仏国土に居る。三人目は、寂靜根 (Zhi ba'i dbang po)⁶²⁾ という。〔すなわち〕西の方角における、世尊・如来〔である〕慧積 (Ye shes rab brtsegs pa)⁶³⁾ の仏国土に居る。四人目は、願智 (sMon lam blo gros)⁶⁴⁾ という。〔すなわち〕北の方角における、世尊・如来〔である〕大威力 (mThu po che)⁶⁵⁾ の仏国土に居る。」

世尊の神変によりその仏国土を見る

それから世尊は、その時、このような神力の造作を造作なされた。その神力の造作を造作なされたことによって、(D. Ga. 289a) 世尊・如来〔である〕普

光功德常多海王の仏国土も普く照らされた。その世尊もまた、菩薩の眷属によって (P. Wi. 329b) 囲まれて、面前して仏国土の功德莊嚴〔すなわち〕未だ見られず、聞かれず、不可思議であり、最高の相すべてを具えたそれらもまた、すなわち、譬えば眼がある人の手において、アーマラカ (Tib. skyu ru ra'i 'bru, Skt. āmalaka)⁶⁶⁾ が有るのが見えるそのように、その仏国土はこの〔釈迦如来の〕仏国土から普く照らされた。その世尊・如来〔である〕普光功德常多海王の身体は通常⁶⁷⁾ 八万四千ヨーヅァナ (dpag tshad) おありである。ジャンプ樹の〔間を流れる〕河の金 (砂金)⁶⁸⁾ のスメール山のごとくに美しく、輝かしく⁶⁹⁾ 明るく (lhan ne) 明瞭に (lhang nger) おられる。身体が四万二千ヨーヅァナほどになった菩薩摩訶薩のみによって囲まれて、直面した。多くの功德莊嚴によって飾られた菩提樹のもとで、師子座に⁷⁰⁾ お坐りになり、百千のコーティ・ナユタの変化を化作なさる。それらの変化も十方の多くの十方のコーティ・ナユタの十方世界に往って、衆生たちに法を教示するのが見える。

世尊の微笑

そこで世尊は菩薩の集い (tshogs) に仰った—

「良家の子たちよ、あなた〔たち〕はこの仏国土における仏国土の功德莊嚴と、菩薩の集いの円満 (phun sum tshogs pa)⁷¹⁾ とが見えますか。」

それからその眷属の中から、八万四千の菩薩が座から立ち上がった。合掌して、どの者も声の一つにして、このように申し上げた—

「世尊よ、我々もマンジュシュリーの行〔である〕、どのような行〔であれ〕それを学びましょう。我々もそのような仏国土の功德莊嚴を成就しましょう。(P. Wi. 330a)」

それからその時、(D. Ga. 289b) 世尊は微笑なされた。それから世尊の面門 (zhal gyi sgo)⁷²⁾ から、多くの色を持った種々の色の光 ('od gzer)、すなわち青と黄と赤と白と紅と水晶と銀の色⁷³⁾ のような多くのものが出た。それらが無量、無辺の諸世界を照らして、再び戻った。〔放たれたその光は〕世尊を三回〔右まわりに〕圍繞して、世尊の頭頂に没した。

微笑の理由

それから世尊に対して、菩薩摩訶薩〔である〕マイトレーヤ（弥勒）がこのように申し上げる—

「世尊よ、微笑をなされた因は何ですか。縁は何ですか。」

世尊は仰った—

「マイトレーヤよ、この仏国土の功德莊嚴を示現した時、八万四千の菩薩はマンジュシュリー童子の仏国土の功德莊嚴のそのような形相 (rnam pa) の、仏国土の功德莊嚴を成就するために発心した。マイトレーヤよ、彼ら八万四千の菩薩のうち十六正士 (skyes bu dam pa bcu drug)⁷⁴⁾が⁷⁵⁾、増上意樂（優れた思い lhag pa'i bsam pa）を具えるよう、まことの思い⁷⁶⁾により^{ことば}句を述べた— 彼ら〔八万四千の菩薩〕の仏国土の功德莊嚴も、マンジュシュリー童子の仏国土の功德莊嚴のようなものと同じくなるであろう。残りの者たちの仏国土の功德莊嚴は、そのようにならないが、〔彼らは〕速やかに⁷⁷⁾無上等正覚を現等覚する⁷⁸⁾。彼らの仏国土の (P. Wi. 330b) 功德莊嚴は、如来〔である〕無量光の仏国土〔である〕極樂世界における仏国土の功德莊嚴のようなものと同じく、過不足なくなるであろう⁷⁹⁾。

菩薩の増上意樂とその果

マイトレーヤよ、菩薩摩訶薩たちの増上意樂を大切にすることを見なさい⁸⁰⁾。
句に述べたに等しくても、誰か増上意樂によってまことの思いから句に述べた、

(D. Ga. 290a) 彼ら〔菩薩摩訶薩たち〕の仏国土の諸々の功德莊嚴は、マンジュシュリー童子の仏国土の功德莊嚴のようになった。誰か劣った心と信ほどによって、言葉に述べた彼ら〔菩薩摩訶薩たち〕も、その劣った業により六百万コーティ・ナユタにおける輪廻をうち捨てて ('khor ba phyir bsnyl te)、五波羅蜜を円満に成就した。

マイトレーヤの質問

それから四人の菩薩〔すなわち〕光頂と、智上と、寂靜根と、願智も四方から、毘瑠璃色の楼閣に坐る無比なる賢れた者たち (bzang ba dag) の中に、

入った。多くの十万コーティ・ナユタの天によって囲まれて、面前に並ぶ⁸¹⁾。
〔すなわち〕仏国土を六種に震動する⁸²⁾。華の大雨が降るし、十万コーティ・
ナユタの楽器が音声を発し、種々の神力の神変 (rdzu 'phrul gyi cho 'phrul)
により来るように現れた。

それから世尊に対して、菩薩摩訶薩〔である〕マイトレーヤがこのように申
し上げる—

「世尊よ、何のために世間において、恐ろしいことに震動したし⁸³⁾、四方から
四つの楼閣が現れたのですか。」

四菩薩の登場

世尊が仰った—

「マイトレーヤよ、(P. Wi. 331a) 彼ら四人〔の〕菩薩は、如来によって勧め
られて、如来を見るために近くに來たのだ。」

このように仰ってから、長くかからずその瞬時に、彼ら四人の菩薩が到着し
た (lhags te)。到着してからも、それらの楼閣から降りて、世尊・如来〔で
ある〕釈迦牟尼のその場所に行き、着いて、世尊の両足に頭でもって礼拝した。
世尊に対して七回〔右まわりに〕圍繞してから、一方〔の座〕に坐った。彼ら
菩薩は坐るやいなや、皆をつれた眷属を四方から、大いなる光明 (現れ) をも
って照らした⁸⁴⁾。

四菩薩の誓願

それから (D. Ga. 290b) 世尊は菩薩の集い (tshogs) に仰った—

「良家の子たちよ、これら來たった四人の善士 (skyes bu'i dam pa) は、不
可思議の境位を被っている (go gyon pa⁸⁵⁾)。大いなる発趣〔心〕 ('jug pa chen
po) によって正しく発趣したから⁸⁶⁾。良家の子たちよ、あなた〔たち〕はこれ
ら善士を尊重して (rim gro skyed)、法を問いなさい。良家の子たちよ、これ
ら善士の誓願を聞きなさい。良家の子たちよ、これら善士の誓願はこのよう
な形です。〔すなわち〕良家の息子、良家の娘〔であり〕、菩薩乗の者〔である〕
彼らは、〔すなわち〕我々が見えるようになった彼らすべては、無上の正等覺

より再び退転しない者になった。二十コーティ劫における輪廻をうち捨てますように⁸⁷⁾。五波羅蜜⁸⁸⁾を円満に完成しますように。女 (bud med) が我々の名前を聞いても、速やかに女身から転じますように、といったそのような誓願を持った者たち〔である⁸⁹⁾〕。(P. Wi. 331b)

法の生滅と平等性

それから世尊はその仏国土を示現した。それらの神変 (rdzu 'phrul) を再び収束なされると、その仏国土も現れなくなった。それから世尊に対して、マンジュシュリー童子はこのように申し上げる—

「世尊よ、一切法は幻のごとくです。世尊よ、すなわち譬えば、幻術師 (マジシャン) は幻術の化作をも行い、幻術が無いようにも行います。世尊よ、同じく一切法も生じるものは生じる、滅するものは滅します⁹⁰⁾。何かにおいて生じたり、滅したりすることはない、それは平等性です (mnyam pa nyid do)。世尊よ、平等性を学ぶ菩薩摩訶薩は、速やかに無上の等正覚を現等覚します。」

〔主な参考文献〕

香川孝雄

- ・『無量寿経の諸本対照研究』(永田文昌堂、1984)

辛嶋静志

- ・『『大阿弥陀経』訳註(一)』(『佛教大学総合研究所紀要』6、1999)

佐藤直実

- ・『藏漢訳『阿閼仏国経』研究』(山喜房仏書林、2008)

ツルティム・ケサン、藤仲孝司

- ・『悟りへの階梯』(UNIO、2005)
- ・『解脱の宝飾』(UNIO、2007)

長井真琴訳

- ・『宝積部三』(『国訳一切経印度撰述部』、大東出版、1971(初版1930) pp. 257-303) →唐実叉難陀訳を扱う。

中村元、増谷文雄

- ・『大乘仏典抄(二)本願と浄土』(『仏教説話体系』29、鈴木出版、1985)

藤田宏達

- ・『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』(法蔵館、1975)
- ・『浄土三部経の研究』(岩波書店、2007)

光川豊藝

- ・『文殊菩薩とその仏国土 — 『文殊師利仏土嚴淨経』を中心に—』（『仏教学研究』45・46 合併号、pp. 1-32、1990）

望月信亨

- ・『浄土教の起源及発達』（山喜房仏書林、1972）

付記：藤仲孝司氏に数々の御教示を頂戴した。

註

1) 藏訳：北京版・大谷No. 760-15, dKon brtsegs, Wi. 282b5-339a4、デルゲ版・東北No. 59, dKon brtsegs, Ga. 248b1-297a3、*'Phags pa 'Jam dpal gyi sangs rgyas kyi zhing gi yon tan bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*

2) 漢訳の対応箇所は以下のとおりである。

- ・西晋竺法護訳『文殊師利仏土嚴淨経』（『大正藏』11, No. 318, pp. 898b24-900b26）
- ・唐実叉難陀訳『大宝積経』「文殊師利授記会」（『大正藏』11, No. 310-15, pp. 347a7-349a21）
- ・唐不空訳『大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴経』（『大正藏』11, No. 319, pp. 914b2-916c29）

3) 十二支縁起の項目をふまえた議論である。

4) 以下に続く文殊の誓願について、光川〔1990〕pp. 16ff. は藏訳をも参照しつつ、以下のよう論評する。

「学者によってこの文殊の願文を十八願とも、十願とも数えられている。しかし竺法護や他の異訳をみても、十願程度には分けられるが、内容的には整然とした願文風にはなっていない。長文のもの、短文のものとなり、長文のものにはさらに細分化してもよいように思われるものもある。その上、願文の間に四ヶ処、終った後に一ヶ処、世尊の補足の挿入文があるなどして整理しにくい状態である。」

こうした点を鑑み、以下の誓願文については、具体的な願数を出さずに、大まかな内容で区切っておいた。

- 5) 六種震動、すなわち動、起、涌、覺／擊、震、吼。
- 6) 五眼の一つであるなら、その規定がある。ここでは単なる仏の眼か。実叉難陀訳と不空訳は「天眼」としており、五眼の一つとは考えていないようだ。
- 7) P. bcud pa, D. btsud pa デルゲ版の読みを採用した。
- 8) P. bcud pa, D. btsud pa デルゲ版の読みを採用した。
- 9) 「仏・世尊」と出ているが、彼らがかつて凡夫であった段階で初発心させ、悟入させている。「入法界品」における、文殊菩薩による善財童子への教導と一致した教相である。あらゆる者が仏に成って始めて、自身は仏に成ると誓っている。文殊が一切諸仏の父母といわれる所以である。この精神は〈行願讚〉にも受け継がれ、その立場は「普賢行」と呼

ばれる。ちなみに〈行願讚〉の現存最古の漢訳は、東晋覺賢（仏陀陀羅）訳『文殊師利兜率經』（『大正蔵』10, No. 296）である。西域では〈行願讚〉が「略華嚴」、〈華嚴經〉が「広普賢行願讚」と伝承される。

なお当該箇所は、当經の竺法護訳にも対応箇所があるので、年代的に「入法界品」の成立における共通素材であったことは明らかである。

Cf. 西晋竺法護訳『文殊師利仏土嚴浄經』（『大正蔵』11, No. 318, p. 898c16-26）

「時文殊師利復白仏言。唯然世尊。我之本願如仏所言。従如七千阿僧祇江河沙劫行菩薩業、不成道場、不致正覚。道眼徹視光觀十方。悉見諸仏普勸化一切衆生悉成仏道。吾心堅住成開化之。布施持戒忍辱精進一心智慧而勸助之。皆是吾身之所勸化。唯然大聖。今觀十方以無罣礙清浄明眼所見。諸仏皆以勸助建立無上正真之道。斯等皆辦。乃吾成無上正真之道。為最正覚也。雖有是言故爾続立不成正覚。仮使所願若具足者乃成仏耳。」

「入法界品」の成立年代については以下の見解がある。ゴメス氏は、龍樹の年代を A. D. 243-300とするラモット説に依って、「入法界品」の成立下限を三世紀後半とする。梶山氏は龍樹の年代を A. D. 150-250とする近年の傾向に依って、その下限がさらに半世紀遡るといふ。ゴメス氏は成立上限については1世紀初頭といふ（Cf. 梶山雄一監修『さとりへの遍歴』上、中央公論社、1994、pp. 449-450）。

- 10) P. gyur te, D. 'gyur te 北京版の読みを採用した。
- 11) 実又難陀訳：なし、不空訳：算師、算師弟子
- 12) P. bcom ldan 'das dag gis ni, D. bcom ldan 'das bdag gis ni デルゲ版の読みを採用した。
- 13) P. tha grur yongs par yongs su ma grub cing / sangs rgyas kyi zhing de'i phyir / ring po che,
D. tha gru yangs pa yongs su ma grub cing sangs rygas kyi zhing de ring po che デルゲ版の読みを採用した。
- 14) 実又難陀訳：彼樹光明遍此仏刹、不空訳：彼樹光明遍照一切諸仏刹土
- 15) 実又難陀訳、不空訳：普見
- 16) 恐らくこれは「無為」を意味する。さらに漢訳の解釈に従えば声聞乗の見道に入ったことを言うのであろう。実又難陀訳：離生位、不空訳：声聞夜摩位
- 17) P. dag gis, D. bdag gis デルゲ版の読みを採用した。
- 18) P. 'gyur ba smon lam, D. 'gyur bar smon lam デルゲ版の読みを採用した。対応する内容は〈無量寿經〉誓願文に確認できなかった。ただし〈無量寿經〉は、極楽世界においては欲するものがすべて満足するという。初期仏典の〈ダンマパダ〉 v. 200には、「Pa. pītibhakkhā bhaviṣṣāma devā ābhaṣṣarā yathā」（中村元訳：光り輝く神々のように、喜びを食む者となろう）とある。中村元氏は、歡喜を食とする色界の神々の食の特徴について述べる（Cf. 中村元訳『ブツダの真理のことは・感興のことは』（岩波文庫、1991、pp. 110-111））。ここでは、四食（段食、触食、思食、識食）を超えた食として、「悦食」

が出される。声聞における食への態度は、大正大学総合仏教研究所声聞地研究会『瑜伽論 声聞地,第一瑜伽処 —サンスクリット語テキストと和訳—』(山喜房仏書林、1998、pp. 18-19)を参照。そこでの食は、自己の出離を願ってのものである。釈尊は絶食を含む苦行の後に、その無益を悟って乳粥を受けて成道する。

- 19) 大乘における道理、または菩薩としての性に合わないという意味か。例えばSkt. KamalaśīlaはTib. Padma'i ngang tshulと訳される。
- 20) この箇所を漢訳者は訳していない。
- 21) D. 'gyur te, P. gyur te 北京版の読みを採用した。
- 22) 極楽のありかたと共通している。還相廻向という言葉ともはまる。智慧だけではなく、菩薩行の指導者像。「入法界品」と地続きの側面が出ている。
- 23) P. rin po chen rnam pa, D. rin po che rnam pa デルゲ版の読みを採用する。
- 24) P. bsams pa tsoms gyis, D. bsams pa tsam gyis デルゲ版の読みを採用する。
- 25) 沙門のあり方については〈瑜伽論〉「声聞地」第一瑜伽処の「沙門莊嚴」に出る。Cf. 大正大学総合仏教研究所声聞地研究会『瑜伽論 声聞地,第一瑜伽処 —サンスクリット語テキストと和訳—』(山喜房仏書林、1998、p. 268ff.)
- 26) 八難とは、辺境の地方、諸根の不具、邪見、仏と法(教え)との無、地獄、餓鬼、畜生、長寿天である。Cf. ツルティム、藤仲〔2005〕p. 67、龍樹著〈スフリレーカ〉vs. 63-64
- 27) 実叉難陀訳：随願積集清淨円満、不空訳：如願円満積集離塵清淨
- 28) P. sngon chad, D. sngan chad
- 29) 実叉難陀訳、不空訳：随諸菩薩所樂時節即皆応之
- 30) 仏国土への「生」(往生)は苦ではないことを前提にしているのか、四苦の中の「生」を出さない。ここでは化生という議論もない。漢訳にも「生」は出ない。
実叉難陀訳：然無寒暑及老病死、不空訳：亦無寒暑及老病死
- 31) P. gang byang chub sems dpa', D. gang byang chub デルゲ版の読みを採用する。
- 32) P. D. tshe bas par bgyis nas 実叉難陀訳：寿尽隆生而、不空訳：寿尽隆生而成正覚
- 33) 仏の成道相を前提にした表現であり、上の説明と共に涅槃の境地を表わす。〈無量寿経〉にも一致する。
- 34) 当経に特徴的な降下的な描写。
- 35) 大乘経典を意味する。
- 36) 三種類の疑。初期仏典や〈俱舍論〉に出る。大乘経典に踏襲された表現とされる。
- 37) P. yin no, D. yin na 不空訳にも「若」があるのでデルゲ版の読みを採用した。
- 38) P. 'gyur, D. gyur 北京版の読みを採用した。
- 39) P. sangs rgyas bye ba khrag khrig phrag 'bum gyi se mtshan, D. sangs rygas bye ba khrag khrig phrag 'bum gyi mtshan デルゲ版の読みを採用する。
- 40) 原語自体は単に「唱える」という言葉であり、そこに「称讃」という意味はない。
- 41) 文殊の名を唱えることは後期密教の〈ナーマサンギーティ〉にまで続く。年代的に考えて、当経のこの記述が出发点なのかもしれない。

- 42) 中村元『仏教語大辞典』【人非人】の説明を参照して、八部衆の総称と理解した。八部衆は仏を詣でるときに人の姿になることもあるので、人ともいわれる。ただし漢訳では Skt. kimnara の訳語に「人非人」が出る場合もある。その場合は八部衆を構成する一つである。
- 43) 不空訳：那謨文殊師利童真菩薩。那謨普見如来応正等覚、実叉難陀訳：南無文殊師利童真菩薩。南無普見如来応正等覚
チベット大蔵経テンギュル冒頭での文殊帰敬偈は、この記述が出典の可能性も考えられる。文言は一致する。ここでは、因としての菩薩、果としての仏を出す。文殊菩薩の永続性を意図している。
- 44) 不空訳：八十俱胝那庾多百千有情、実叉難陀訳：八万四千萬那由他衆生
- 45) デルゲ版は sbyod pa (spyod pa) に見える。漢訳は不明瞭である。
- 46) 〈無量寿経〉諸漢訳の対応箇所には、諸仏国土の特徴が一仏国土に摂取されるという記述はない (Cf. 香川 [1984] p. 103)。例えば『大阿弥陀経』では「其仏即選択二百一十億仏国土中諸天人民之善悪国土之好醜、為選択心中所欲願」(Cf. 辛嶋訳 [1999] p. 140: そこで仏は、二百十億の仏国の神々や人々の善悪と国土の美醜を選んで (説き)、心中の願を選び取らせた)、『平等覚経』では「其仏則為選択二百一十億仏國中諸天人民善悪国土之好醜、為選心中所願用与之」、『無量寿経』では「即为広説二百一十億諸仏刹土天人之善悪国土之粗妙、応其心願悉現与之」である。一方で梵本、蔵訳には明確に一仏国土への摂取が表現されている。

Cf. 香川 [1984] p. 102

「atha khalv Ānanda sa Dharmākaro bhikṣur yās teṣām ekāśītibuddhakoṭī-nayutaśatasahasrāṇām buddhakṣetraguṇālamkāravūhasampadas tās ca sarvā ekabuddhakṣetre parigrhya, bhagavato Lokeśvarasya tathāgatasya pādaū śirasā vanditvā, pradakṣiṇīkṛtya, tasya bhagavato 'ntikāt prākramat.」

(Cf. 藤田訳 [1975] pp. 55-56: さて、アーナンダよ、かのダルマカーラ比丘は、これらの八十一の十万・百万・千万倍という仏たちの仏国土の功德の嚴飾と莊嚴の成就を、すべて、一つの仏国土の中におさめとって、世尊ローケーシュヴァラ・ラージャ如来の両足を頭に頂いて敬礼し、右まわりにまわって、かの世尊のそばから退いた。)

上記下線部分の蔵訳は、「de dag thams cad sangs rgyas kyi zhing gcig tu yongs su bzung nas」である。対して〈文殊仏国経〉には初期の時点から、一仏国土への摂取が説かれている。以下の竺法護訳のとおりである。

Cf. 西晋竺法護訳『文殊師利仏土嚴浄経』(『大正蔵』11, No. 318, p. 899c10-16)

「時文殊師利復白仏言。今我願是諸不可計。無量仏土功勳嚴浄目之所視。由從所願瑞應処所。皆使合并成一仏土。不計声聞縁学嚴浄五濁惡世発意之頃。正使我身江河沙劫称歎諸国功勳嚴浄。無有限量不得其底。我所誓願復過越彼。無能究竟証明我者。独仏纒鍊明知我耳」

- 47) 漢訳の対応箇所なし。無量無数の仏国土の莊嚴は個々に確認しえないので、一つにまと

めて提示するより、他に明示する方法はないという意味。

- 48) 実叉難陀訳：如我所願唯仏能知、不空訳：世尊、如我所願唯仏世尊応正等覺余不能知。
仏を証人とするのは〈無量寿経〉と同じである
- 49) P. nas, D. na デルゲ版の読みを採用した。
- 50) 大乘経典において、今ここに説かれる当該経典やその所説を、王者、最高、本源とすることはしばしば見られる。例えば「三昧王経」「普賢行願王経」という名称や、〈法華経〉を経典の王とする表現や、全ての仏法の根源と自称する〈金剛般若経〉などの例がある。
- 51) P. bur, D. bu デルゲ版の読みを採用した。
- 52) P. ni, D. na デルゲ版の読みを採用した。
- 53) 実叉難陀訳：住最上願、不空訳：願住高踊 実叉難陀訳を採用した。
- 54) P. de, D. de na デルゲ版の読みを採用した。
- 55) 実叉難陀訳：普光常多功德海王、不空訳：普光常多功德海王
- 56) 拙稿「文殊菩薩の浄土経典 一蔵訳〈文殊師利仏土厳浄経〉第一函の和訳研究一」註43を参照。定型的な表現である。
- 57) 実叉難陀訳、不空訳：光明幢
- 58) 実叉難陀訳：無憂徳、不空訳：無憂吉祥
- 59) P. gyis, D. kyi デルゲ版の読みを採用した。
- 60) P. ye shes bla ma, D. ye shes da ma 漢訳を参照して北京版の読みを採用した。実叉難陀訳、不空訳：智上
- 61) 実叉難陀訳、不空訳：智王
- 62) 実叉難陀訳：諸根寂静、不空訳：寂根
- 63) 実叉難陀訳、不空訳：慧積
- 64) 実叉難陀訳、不空訳：願慧
- 65) 実叉難陀訳、不空訳：那羅延
- 66) 樹木の名前。実叉難陀訳：菴摩勒果、不空訳：摩勒果
- 67) P. tha mal par, D. tha mal pa 特別な所作がなされた、例えば神変などでそのように化作されたのではなく、という意味。
- 68) Cf. 望月信亨『佛教大辞典』p. 179【閻浮檀金】「即ち閻浮樹の間を流るゝ河の意にして、閻浮檀金は、其の河より生ずる、砂金を云ふ。大智度論第三十五に「此の洲上に此の樹木あり。林中に河あり、底に金砂あり、名づけて閻浮檀金となす」といへる其の證なり。」
- 69) P. lham me, D. lam me 北京版の読みを採用した。
- 70) P. seng ge'i khri li, D. seng ge'i khri la デルゲ版の読みを採用した。
- 71) 清浄な仏国土に成就する種々相については、〈撰大乘論〉所説の「十八円浄」、『無量寿経論』所説の三種二十九荘嚴功德などが有名である (Cf. 『浄土宗大辞典』【十八種円浄】)。『無量寿経論』では、「器世間清浄」(十七種荘嚴仏土功德成就)、「衆生世間清浄」(八種荘嚴仏功德成就、四種荘嚴菩薩功德成就) が説かれる。この三種荘嚴は願心によるものとされる。

- 72) Tib. sgoは「門」「入り口」の意味。中村元『仏教語大辞典』【面門】の項目には、①眉間、②顔、口、鼻と口との中間、の意味を出す。
- 73) 実叉難陀訳：なし、不空訳：青黄赤白紅紫等
- 74) 竺法護訳：十六正士、実叉難陀訳：十六善大丈夫、不空訳：十六正士
 典型的なものであるためか漢訳にも「十六正士」を構成する各具体名は出ていない。
 Cf. 田中公明「大乘仏教在家起源説再考 — 『般舟三昧経』の八菩薩と十六正士を中心に」(『印度学仏教学研究』61-1、2012)
- 75) P. gis nis, D. gis ni デルゲ版の読みを採用した。
- 76) P. bsam pa theg pas, D. bsam pa thag pas デルゲ版の読みを採用した。
- 77) P. myur du, D. なし 北京版の読みを採用した。実叉難陀訳：速、不空訳：速疾
- 78) 速いが仏国土の荘嚴は充分ではない、遅い行により荘嚴を完成させることとの対比。
- 79) 多すぎる事、少なすぎる事はなく、全く等しいという意味。
- 80) P. gtses spras byed pa la ltos, D. gces spras byed pa la ltos デルゲ版の読みを採用した。
 実叉難陀訳：弥勒当知。諸菩薩等志樂既勝、所成亦大、志樂勝者、言我成就如文殊師利莊嚴仏土、不空訳：慈氏、汝今見不意樂成就菩薩而能作大利益。由増上意樂故発是勝願。是故得彼仏刹如文殊師利。
- 81) P. mdun du gzhag pa dar te, D. mdun du bdar te デルゲ版の読みを採用した。
- 82) 六種震動、すなわち動、起、涌、覚／撃、震、吼。
- 83) P. D. 'jig rten tu dogs cher gyos par gyur ba dang、実叉難陀訳：なし、不空訳：於此世界大地震動
- 84) 実叉難陀訳：彼四菩薩光明遍照此之大会、不空訳：彼菩薩光從四方來普照大衆
- 85) 難解な表現である。Tib. gyon paは「着る」の意味。直後の「発趣」とのかね合いでは、「鎧 (go cha) を被る」。しかし漢訳からは支持されない。
 実叉難陀訳：此四善大丈夫志願所趣、皆不思議、不空訳：此四正士住不思議旨趣
- 86) 理由句として理解した。
- 87) P. 'khor ba'i phyir bsnyal bar gyur cig, D. 'khor ba phyir bsnyil bar gyur cig 三段落前の表現を参照してデルゲ版の読みを採用した。『蔵漢大辞典』p. 1751にも「phyir bsnyil ba」の項目がある。
 実叉難陀訳：棄捨二十億劫生死流転、不空訳：超二十俱胝劫流転生死
- 88) P. pha rol tu phyin pa lta, D. pha rol tu phyin pa lnga デルゲ版の読みを採用した。
- 89) P. ces bya bar, D. ces bya ba
- 90) P. skye bar skye 'gag kyang 'gag ste / gang la skye ba dang / 'gag pa ma mchis par de ni, D. skye yang skye / 'gag kyang 'gag ste / gang la skye ba dang / 'gag pa ma mchis pa de ni デルゲ版の読みを採用した。
 実叉難陀訳：諸法消滅亦復如是。而此消滅即無生滅。以無生滅是則平等、不空訳：世尊如是一切法生已復滅。亦無生滅此則平等。